

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第3号

平成27年1月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

吉野朝の悲哀、和歌の世界にも

動乱のただ中生まれた、宗良親王撰「新葉和歌集」

新葉和歌集は、時代の動乱が故に勅撰集として成立せず、長慶天皇の宣旨を以て准勅撰集の地位を得た、公家文化最後の和歌集である。そして、この『序』には吉野朝の悲哀が記されている。

岩波文庫「新葉和歌集」(岩佐正校訂)『序』

あめつちひらけはじめしより、あしはらの代々にかはらず、世をさめ民をなで、こゝろざしをいひこゝろをなぐさむるなかだちとして、わが國にありとしある人、あまねくもてあそび、さかりにひろまれるは、たゞこの哥の道ならし。

これによりて、ならの葉の名におふみかどの御時より、正中のかしこかりしおほん世にいたるまで、えらびあつめらるゝ跡、十あまり七たびになむなれりける。そのあひだ、家々にあつめをけるたぐひ、又そのかづをしらざるべし。しかあるを、元弘のはじめ、秋つしまのうち、浪のおとしづかならず、春日ののほとり、とぶ火のかげしばしば見えしかど、ほどなくみだれたるををさめて、たゞしきにかへされしのは、雲のうへのまつりごと、更にふるきあとにかへり、あめのしたの民、かさねてあまねき御めぐみをたのしみて、あしきをたひらげ、そむくをうつみちまで、ひとつにすべおこなはれしかど、一たびはみだるゝ世のことわりなればにや、つひに又、むかしもろこしに、江をわたりけむ世のためしにさへなりにたれども、ちはやぶる神代より、くにをつたふるしるしとなれる三くさのたからをもうけたえへましまし、やまともろこしにつけて、もろもろの道をおこしおこなわせ給〔ふ〕おほんまつりごとなりければ、伊勢のうみのたまもひかりことに、あさか山のこの葉も色ふかきなむおほくつもりにたれど、いたづらにあつめえらばるゝ事もなかりけるぞ、ぬひものをきて、よるゆくたぐひになむありける。

こゝに呉竹のその人かづにつらなりても、三代の御門に仕へ、わかかの浦の道にたづさひては、なゝそぢのしほにもみちぬるうへ、か

つことを千さとのほかにさだめしむかしは、野邊のくさ、ことしげきにもまぎれき。こころを三の衣の色にそめぬるいまは、あしのまのふねのさはるべきふしもなければ、かつはおいのこゝろをもなぐさめ、かつはすゑの世までものこさむため、かみ元弘のはじめより、しも弘和のいまにいたるまで、世は三つぎ、としいそとせのあひだ、かりの宮にしたがひつこうまつりて、をりにふれ時こつけつゝ、いひあらはせることの葉どもを、玉のうてな金のとのより、かはらのもど、なはのとぼそのうちにいたるまで、人をもちてことをすてず、えらびさだむるところ、千うた四ももちあまりはたまき、名づけて新葉和歌集といへり。

花をたづね、郭公をまち、月をながめ、雲をもてあそぶよりはじ

めて、花の都にわかれををしみ、草の枕にふるさとをこひ、いすゞ川いはいし水のながれをくみては、光をやはらげて塵にまじはるちかひをたふとび、鶴のはやし、しかの園の跡をたづねては、まよひをのぞきて、さとりをひらくむねをこひねがふ。あるはかたいとのあひ見ぬ戀に思

〔ひ〕みだれ、あるは呉竹のうきふししげき世をなげきても、恨をかこち、おもひをのべ、えぶさのさかひのつねならぬことわりをかなしみ、また百敷のうちにしては、雨露のめぐみをほどこし、やしまのほかまでも浪風のおとしづかにして、むしろ田の鶴のよはひにあるそひ、すみよしの松の千とせをたもたせ給ふべきすべらぎ



のおほん光をいはひたてまつるにいたるまで、こゝろうちにうごき、こと葉ほかにあらはれて六くさのすがたにかなひ、一ふしのとるべきあるをば、これをすつる事なしといへども、よものうみのなみのさわぎも、こよろぎのいそとせによべらば、家々のこの葉風にちり、浦々のもしほ草、かきもらせるたぐひも又なきにあらざるべし。

そもそもかくえらびあつむる事も、たゞこころのうちのわづかなることわざなれば、あめのしたひろきもてあそびものとならむ事は、

おもひよるべきにあらぬを、はからざるに、いま勅撰になぞらふべきよしのみことをかうむりて、老のさいはひのぞみにこえ、よろこびのなみだ、袂にあまれり。これによりて、ところどころあらためなほして、弘和元年十二月三日これを奏す。

おほよそこの道にたづさはらむ人は、いよいよなにはづのふかきこゝろをさとり、この時にあへらむともがらは、あまねくしきしまの道ある御代にほこりて、春の花のさかゆるたのしみを、四のときにきはめ、秋の夜のながき名を、萬のとしにとどめつゝ、露ゆき霜きたりて、濱千どりの跡たゆる事なく、あめながくつち久しくして、神代の風はるかにあふがざらめかも。(扇谷転載)

我知らず畏敬の念を起こさせる談山神社 一方、最期の遺跡さえ埋もれていた楠正行

吉野山・如意輪寺境内に残る「楠左衛門尉髻塚碑」も南朝の哀史を漂わせる。

慶応元年(1865)、頼山陽に学んだ奈良県五条出身の国学者森田雪斎(1811~1868)が撰文したもので、藤原鎌足を祀る談山神社の立派さに比して、正行の髻を埋めた場所が荒れ果てて、草に埋もれていることに涙する。

同じ忠臣なのに、この差は何としたことか…。

楠正行の髻塚(もとどりづか)の碑(現代語訳)

吉野山・如意輪寺境内に建つ

正平三年(1348年)の正月、後村上天皇は吉野に滞在されていた。このとき高師直(こうのもろなお)率いる賊軍が大挙して吉野へ攻め込んだ。左衛門尉(さえもんじょう=官名)・楠木正行(くすのき・まさつら)は、一族郎党百四十三人を従え、後村上天皇のもとに参内した。お暇ごいを申し上げたあと、後醍醐天皇の陵(みささぎ)にもお別れをした。そして、如意輪寺の境内で、おのおの髻(もとどり)を切り落とし、壁に姓名を書きつけた。それから戦場へ赴き戦いに敗れて、一族郎党全員が戦死したのである。

慶応元年(1865年)の秋、私は備中(岡山)から大和(奈良)へ帰郷した。談山に登り、吉野に詣でようかと思っていたところへ、会津田正臣君がやって来た。正行公の髻塚を顕彰する石碑を建立したいから、碑文を書いてほしいというのだ。私は言った。「ちょうど談山と吉野山に行こうと思っていたところだ。帰ってから文を作るから、しばらく待ってられないか。」

はじめに談山に登り、藤原鎌足をまつる談山神社に参詣した。敷地は広く、建物も立派で、我知らず畏敬の念が起きてくる。ところがその後、吉野山に登って正行公の髻を埋めた場所を探したが、その場所は荒れ果てて、草に埋もれていた。そばを通る人たちも、そこが正行公の遺跡とは知らないようすだ。

私は、その場所を行ったり来たりしながら、いつまでも立

ち去ることができなかった。涙がポタポタとあふれ落ちた。私はつぶやいた。

「正行公も鎌足公も、同じように朝廷につくした忠臣だ。鎌足公は一撃で悪人を倒して朝廷の危機を救ったから、最高の官位にのぼり、子孫も繁栄した。そればかりか、今も神社にまつられている。一方、正行公は国賊に敗れて戦死した。南朝はその後振るわず、子孫も死に絶えてしまった。そして、その最期の遺跡さえも、埋もれてしまっている。同じ忠臣なのに、この差は何としたことか。」

しかし、私は涙をぬぐった。

「運不運の差はあっても、この二人の功績は同じではないか。鎌足公の大化の改新は、天皇家の危機を救った偉業であった。正成・正行父子は、敗れたとはいえ、節操を貫き通し、徳を不朽に伝えた。この徳は日月にも比すべきものである。だから、鎌足公のほうが勝っているとは言いきれない。運不運の差はあっても、二人の功績は同じである。」

私が帰ると、正臣君が碑文の催促に来たので、鎌足公と正行公の功績は同じだという話をし、それにこう付け加えた。

「いま欧米の蛮人どもが、好き勝手な振る舞いをして、朝廷を悩ませ奉っている。国土たるもの、国家のために力を尽くす時は、今をおいてない。はかりごとが成就したならば、鎌足公のように後世まで祀られましょう。しかし、たとい失敗したとし

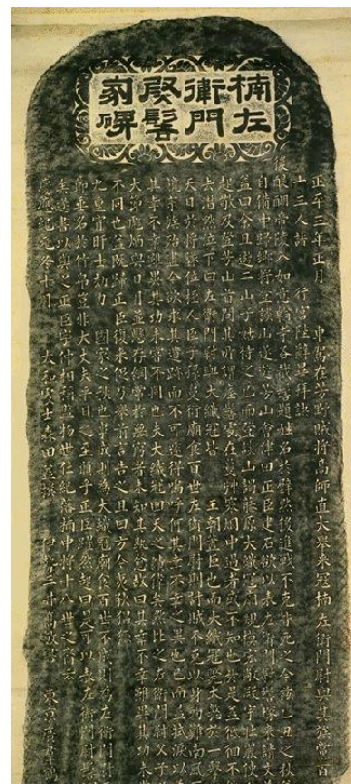
ても、正行公のように節義に死して、名を歴史に刻めるではないか。男児の本懐、これにすぎるものはない。」

正臣君はよろこんで立ち上がった。

「その言葉で、正行公の髻塚を顕彰できるではありませんか。」

そこで、私は碑文を書いて正臣君に渡した。

正臣君は、字(あざな)は仲相(ちゅうしょう)、通称は監物(けんもつ)と言い、代代紀伊藩に仕えている。楠正成公十八世の子孫である。



慶応元年十月、大和(奈良)の森田益が撰文した。

◀写真：京都大学付属図書館・維新資料画像データベースより 画像番号0707030▶

(「四條殿楠正行の会」代表 扇谷 昭)